

平内好子さんが遺されたもの

布村 昇

Memory of late Yoshiko Hirauchi

Noboru Nunomura

本会会員として長年ご尽力いただいた平内好子さんがニュージーランドの震災でなくなりました。平内好子さんは富山県内では未開拓であったササラダニをはじめとする土壌動物を主な研究対象とされ富山県の生物相解明に大きく貢献し生物や理科教育の発展に尽くされました。一方、教育者として教え子たちの全人的成長にも大いに貢献されました。特に本会では5年にわたり副会長として、持ち前の快活さと卓抜した指導力により多くの会員に夢と希望を与え、会の発展に大きな貢献をされました。益々のご活躍が期待されていた矢先に平内さんを失ってしまいました。

平内さんは富山市にお生まれになり、富山高等学校、富山大学文理学部理学科、同理学専攻科(生物)を卒業され、昭和47年4月から福野高等学校平分校教諭を振り出しに泊中学校、魚津西部中学校、泊高等学校で教鞭を執られ、10年から、生涯学習校「新川みどり野高等学校」の新設準備に関わられ、12年から新川女子高等学校・新川みどり野高等学校教頭、県立滑川高等学校を経て平成17年から新川みどり野高等学校校長、そして滑川高等学校長をつとめられ、海洋高等学校と滑川高等学校による新「滑川高等学校」の開設準備にあたられました。

さて、平内好子さん(当時は堀好子さん)は高校時代の同級生でしたが、クラスの人気者で、クラスメートの信頼を集めていました。当時は物理学者志望で「湯川秀樹のような学者になりたい」と言っておられたことを覚えています。大学に進んで以後は交流がありませんでしたが、20年前「高等学校に戻ったので本格的に生物学の研究をしたいし、高校で教える以上、教師は研究者でな

くてはならない」と言い、「生徒に生命の多様性、生態、環境との関連を教えるのに身近で総合的で好都合なので土壌動物を選びたい」ということでテーマのことで相談にこられ、再会しました。テーマは中型土壌動物では種類も多く、今からのスタートでは大変だと思い、多足類はどうだろうかと返事し、土壌動物学会入会を勧めました。後者については土壌動物の第一線の研究者と親しく話ができることで、楽しみになり、勤務がかなり大変なのに毎年出席しておられました。テーマについてはしばらく考えられたようですが、「ササラダニをテーマにすることにした」と報告に來られました。研究が進んでいてかなりの種に名前がついていて、文献や指導者もあり、環境診断など多彩なアプローチが可能なおこと、たまたまササラダニを専門とする大西純さんが富山に勤務となったことも大きな要因と伺っています。当時勤務しておられた泊高等学校で土壌動物を研究・教育するシステムを築き上げられました。それが完成した矢先に別の高校に転勤になり、新たにシステムを作ることになりました。その間、本学会の他日本土壌動物学会、日本ダニ学会等の会員として活躍されました。とくに日本土壌動物学会には熱心に出席され、また学会員からの人気者でした。平内さんが出席されない時は、「なぜ欠席されたのか」と多くの人に聞かれたものです。

平内さんの土壌動物学研究

平内さんの土壌動物に関する研究をジャンルごとに分類すると次の5つになると思われます。ササラダニを研究し始めて、別刷りに番号を振るようになってからでも57を数え、それ以外のもの

ブナ林のデータがほしいとの依頼があり、森林総研の関係者を紹介したこともある。そんなやり取りの中で、お互い、虫だけでなく、花も大好きなことが判明した。富山大学の増田恭次郎先生は、東京都立大学生物学科の同級生で、立山花巡りには何回か参加している。次回はぜひ一緒に参加しましょうと言いながら、なかなか日程の調整がつかず、一緒に立山に登ることはできなかった。しかし、帰りに平内家に立ち寄り、採れたての野菜とおいしい料理をごちそうになり、のびのび育つ野菜や草花であふれた庭をながめ、つきることなくおしゃべりしたことは忘れられない。

立山といえば、私が駆け出しの頃、2番目に書いた報告が「北アルプス立山の高山帯における粘管目(トビムシ類)」(昆虫、34:339-346)である。1966年発行だから、45年も前になる。トビムシの魅力に取り付かれて、ぐいぐい土壌動物の泥沼に引き込まれていった当時の自分と、今、ササラダニに感動し、その魅力に取り付かれて、どんどん引き込まれていく平内さんの姿が重なって見えた。ササラダニにはステキな和名が付いていて、日本語の図鑑がある。一方、トビムシはほとんど和名がなく、日本語の図鑑もない。このままではトビムシ研究者は育たない。何とかしなければ、と、あせりを感じた。平内さんに刺激されて行った最初の行動は、トビムシ研究会を立ち上げることであった。幸い、多くの関係者の賛同と協力を得て、まず日本産トビムシ類に和名を付けることができた。私が言い出さなくても、いずれは必要になり、どなたかがまとめ役になられたとは思う。

でも、平内さんに出会ったおかげで、その時期を早める効果は大きかった。現在はトビムシの科別の解説を順次 Edaphologia (日本土壌動物学会の機関紙) に投稿し、全科揃った時点で図鑑として出版しようと計画している。出版されたら真先に平内さんに会って「ねえ、見て、見て! ついに日本語のトビムシ図鑑ができたのよ!」と報告するつもりだった。残念でならない。

平内さんからの手紙は、いつも便箋に手書きで、整った小さな字がいっぱい詰まっている。内容が豊富であり、時には観察データなどが含まれているので、大切に保管しておいた。また、毎年いただく賀状は、平内さんが、あふれんばかりの情熱と愛情を注いでいる対象を表現したものである。立山とチングルマ、調査地の有峰、愛犬のサクラとノン、そしてササラダニ……。添付したのはその中の一枚である。葬儀のとき、ご遺族に、追悼文として一部を公表したいと申し出たら、「どうぞ、どうぞ、何でも自由に使って下さい」と快諾していただいた。ニュージーランドで、安否不明のまま、ご遺体が確認できるまでの長い期間、つらい思いをされたはずなのに、気丈に、しっかり経過報告された娘さん。すばらしい跡継ぎを残されたと感じた。二人の親友の弔辞を聞きながら、平内さんを囲む方々は皆、私と同じように多くの刺激を受け、励まされていたことが、手に取るように伝わってきた。平内さんの体は無くなって、その志は関係者全員の心の中で生き続けるに違いない。

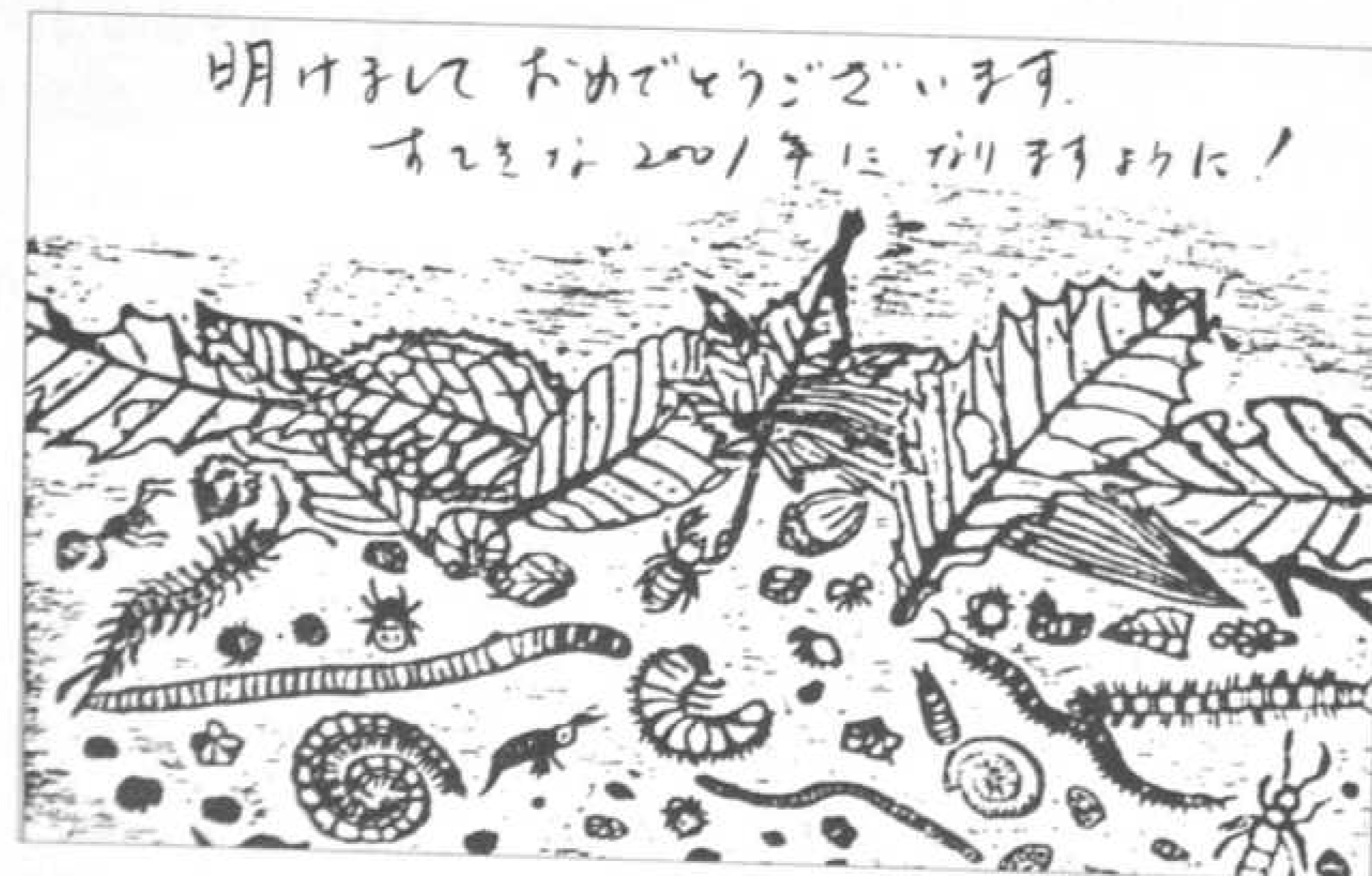


図1 平内好子さんからの絵はがき



も20余りあるので総数は80程度と思われます。

① ササラダニ新種の記載

遺稿を含め9種を記載されましたが、まだ多くの種の記載を準備しておられたようです。

② 富山県研究の中心ではなかったと思いますが、私が富山市科学博物館の共同研究テーマであった有峰のブナ林や富山市内の里山などの同定をお願いしたものや他から頼まれた立山アルペンルート、富山市ファミリーパークなどの調査の分担をお願いしたが、結果として富山県東部でのササラダニをはじめとする土壌動物相の知見が飛躍的に増大しました。

ところで、平内さんのフィールドである富山の自然は大きな標高差、様々なタイプの自然があり、なかでもブナ林を中心として多くの森の土壌動物調査を実施し比較して富山県東部-中部のササラダニ相の基本が解明されました。

③ 土壌動物と植生環境との関係、環境評価

土壌動物と植生環境、環境評価については県内の生物教員の植物生態グループとの共同研究仲間と共同のフィールドで研究が多く、ササラダニをはじめとする土壌動物と植生環境との知見が飛躍的に増大しました。平内さんはフィールドでたちどころに樹木名を的確に言い当てるので植物に強い人と思いましたが、お亡くなりになってから膨大な植物図鑑を調べ自ら撮影し写真を撮り、大変努力して植物を勉強されたことを知りました。

④ 生徒の関心の高揚と土壌動物の教材化

たえず生徒の知識理解の向上と関心の高揚を通し学力や人間性の向上を意識しておられた。生徒の生命、自然理解への身近でかつ有効な素材として学校で土壌動物学習のシステムを構築し、分かりやすい検索表の製作に試行錯誤された跡が確認されました。これにより平成9年、「土壌動物を指標とした林の環境調査法」で東レ理科教育賞受賞されました。

⑤ 一般への土壌動物の啓蒙、普及・教育

土壌動物の啓蒙、普及自然界での役割につい

て多く講演、やさしい解説文を執筆し、自然保護にも貢献されました。その一つ一つにもササラダニをはじめとする土壌動物がかわいくてしょうがないという愛情にあふれていました。

平内さんのひととなり

ところで平内さんは土壌動物研究以外の活動も眼を見張るものがあり研究の中にも色濃く反映している。教育者としての多くの生徒、後輩が薫陶を受けましたし、生徒たちやその保護者たちからも敬愛されていました。自身でも窮地に追い込まれたこともあったと思うが口癖のように「だいじょうぶ！だいじょうぶ！」と自らにも言い聞かせ、生徒を励まし続けておられ、みずから研究する姿が生徒や後輩に大きな影響を与えておられました。

高校生のことをいつも念頭におき大切にしておられました。何度も調査などの日程のすり合わせをしましたが、教え子との時間が最優先でした。教育者としての幅広い視点を持ち、それが研究にも色濃く反映していると思います。生態学や生物学のいろいろな側面からアプローチしておられ、大学、研究所、博物館の研究者と違う視点だと思います。

一方卓越した手腕により生涯学習高校の発展、高等学校の統合に尽力されました。きちんとした性格であり、理路整然としている一方、アイデアが豊富で決断力がある方でした。6年前には「自分が副会長になるから、私に会長を」と叱咤激励されたものです。

平内好子さんは大きな夢をもって本格的に国際的な研究をしたいと思っておられたと思います。富山外国語専門学校実務英語科に入学されたのもその第一歩でした。ご自分は今からというときに旅立たれたことは残念でなりません。平内さんが残された有形・無形の影響はあまりにも大きく、残された者は平内さんに恥ずかしくないように生物学に精進しなくてはならないと思います。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

追悼 中川定一先生

中田政司

富山県中央植物園 〒939-2713 富山市婦中町上樽田42

Lament for the late Teiichi Nakagawa

Masashi Nakata

Botanic Gardens of Toyama 42 Kamikutsuwada, Fuchu-machi, Toyama 939-2713, Japan

昭和53年以来の富山県生物学会会員であり、長年にわたって当会の理事を務められた中川定一先生が、平成23年6月2日、急逝された。あと1週間で76歳を迎えられるご予定であった。5月22日に万願寺で行われた中央植物園友の会植物誌部会の植物調査会には久しぶりに参加され、昼にお帰りになられたものの、いつもとお変わりない様子だったとうかがっている。突然のご逝去に対する驚きと、優れた地域植物研究者であり教育者であり自然環境保全の実践者であった先生を失ったことに対する痛恨の思いがこみ上げる。まだまだ活躍していただき、教えていただきたいことが沢山あった。

先生は昭和10年6月9日、神戸にお生まれになった。1歳の時に氷見市においてになり、豊かな自然の中で少年時代を過ごされ昭和26年に氷見高校を卒業された。高校時代には生物クラブに入っておられたとのことで、早くから生物に関心を持たれていたようである。富山大学教育学部を昭和33年にご卒業後、砺波高校の助手を経て氷見市南部中学校に正式に採用、以来氷見市内の中学校理科教諭を歴任され、平成7年に十二町小学校校長を以て教職を退かれた。

意外なことに先生の若い頃の趣味は海釣りだったそうで、何事も徹底的にやらないと気が済まないという性格から船外機付きのボートを購入するという凝りようで、お一人で海に出ていてボートがひっくり返って海に投げ出されたということも1度ではなかったらしい。釣りが趣味という植物研究者は多いと聞くが、先生もそのお一人であったようだ。



図1 平成15年の「すげの会」富山大会で (太田道人氏提供)

植物を研究されるようになったのは、教員時代に筑波大学に内地留学されたことがきっかけだったようである。生物学会への入会もこの頃で、モミ、スダジイの林や、氷見市の植物に関する研究報告を次々に会誌に発表されている。しかしその後の植物研究に大きな影響を与えたのは、昭和60年頃の石川県七尾市の小牧 旌(こまき せい)先生との出会いであった。以来小牧先生を囲む「能登の山を歩く会」に参加され、文字通り小牧先生の後について植物を実地で勉強された。小牧先生といえば『加賀能登の植物図譜』が著名であるが、この図譜の前身である『図鑑能登の植物』は中川先生のバイブルであったようで、いたる所に書き込みが施され、カバーが擦り切れるほど使われている。後に中川先生が入会された「すげの会」の正木智美氏は、平成22年に鳥取で行われた大会後のエクスカージョンで、この本を小脇に抱えて山に登る中川先生の姿に皆が感銘を受けたと述べ